

異性について特定の条件下ではなく包括的な状況が示され議論できる新しい描像の切口が示された。Lennard-Jones 12-6 ポテンシャルのような簡単な相互作用系を示す二成分系に積分方程式を用いて決定した過剰エンタルピーや過剰体積は実験値を十分に説明できることが示され、さらには相図を作成し臨界状態付近の挙動もほとんど説明し得る範疇であることが示された。これらの話題にはインターネットを利用して測定したばかりのデータを取り寄せ、議論に加えるなどホットな話題にはホットに対応し、議論の空間と時間を有効に利用するこれからの方向の一端が見られた。

最後に準備したあった総合討論の時間を全て途中で使い、オーガナイザーの田村がご協力のお礼を述べた。

引き続き大学の近くの和風レストラン「ミスマッチ」で行われた懇親会にまでワークショップの話題を肴に活発な議論、色々の情報交換と懇親の宴が続いた。日頃同じ熱力学の方法論を使う溶液の研究者が今最もホットな話題についてその研究の切口の違いによる特徴を時間にとらわれず幅広く情報交換ができた場であった。

話題提供を快くお引き受け頂いた講師の先生方、ご支援を頂いた熱測定学会および多大なるご援助を頂いた近畿大学にオーガナイザー一同紙面をお借りしてお礼申し上げます。

(木村隆良・田村勝利・大場正春・小川英生)

Prof. Edgar F. Westrum, Jr. (Univ. of Michigan) 講演会報告

実験化学熱力学の世界的権威であり、また日本熱測定学会発足の前後からのわが国のこの分野の発展に陰に陽に尽力されたウェストラム教授が来日されたのを機会に、1999年7月19日に中央大学理工学部において、日本熱測定学会・中央大学理工学研究所共同主催の講演会を開催した。

講演は「Phonon Dispersion Treatment for the Heat Capacities of Vitreous and Crystalline Alkalidisilicate Phases and their Reconciliation with the Barber-Martin and Komada-Westrum Approaches」と題して、物質の低温熱容量の解析という古典的な課題に対する最近のアプローチ、特にBarber-Martinの方法および駒田-Westrumの方

法について歴史的な観点にさかのぼって述べられた。これらの解析法をアルカリ金属二ケイ酸塩の結晶相およびガラス相に適用した最近の同教授の研究成果についての議論がなされた。ウェストラム教授がお若い頃にDebye博士やTarasov博士と討論したことなどの思い出話も交えて、興味深い講演会であった。

ウェストラム教授の来日が決定するのがおくれ、講演会開催のアナウンスは幹事会での報告と学会のホームページによるだけであったが、約40名の参加者があり、有意義な講演会であった。

(中央大学理工学部 高橋洋一)